

## 令和元年度学校評価（自己評価書）

樟南高等学校

### 1 はじめに

少子高齢化が急速に進行する社会において、中学生やその保護者から通いたい・通わせたい学校として選ばれるには、学校の特色をどのように構築するかが急務である。過去11年間の評価を踏まえ、今年度は、「より特色のある学校づくり」という観点から、教育活動の成果や課題を明確化していきたい。

### 2 実施方法

今年度も引き続き、各部・学科・コース毎に年度当初に設定した評価項目について、それぞれの構成員が評価した。

評価者は管理職を除く本務職員93名。

### 3 実施期間

令和2年2月23日～3月12日

### 4 評価方法

(1) 評価の尺度：評価項目を5段階で評価する。

5： かなり成果が上がっている。計画・実践ともよい。望ましい状況である。

4： 一歩前進している。ややよい。よい方向に進んでいる。

3： 普通である。

2： 努力を要する。問題点がある。一歩後退した。

1： まったくできていない。

(2) 所見

よかった点や来年度の課題等を記述する。

## 5 結果報告

評価項目	評価者	評価結果	
		今年度	昨年度
校務分掌等の組織運営の改善	教務部	3	3
挨拶や服装等のマナーアップ	生徒指導部	4	4
個々の生徒理解と適切な支援	教育相談別室支援	4	4
生徒の能力・適性に応じた進路指導	進路指導部	4	4
難関大学への挑戦	特別進学指導部	3	4
募集定員確保のための組織運営	広報部	3	2
健康と安全の推進	保健部	3	3
トイレ、階段、特別清掃区域の清掃の徹底	環境整備部	4	4
図書館の利用促進～貸し出し本の増加	図書館部	4	4
窓口での接客対応の充実	事務部	5	4
上級資格への挑戦	商業科	4	4
基本的な生活習慣の確立	〃		
挨拶・服装指導の徹底	文理コース	3	4
積極的に授業に参加する態度の育成	英数コース	4	4
豊かな人間性の育成	未来創造コース	3	3
授業への集中力の養成	〃		
各種検定試験と資格取得への挑戦	機械工学コース	3	4
資格取得、検定試験への指導の充実	電気工学コース	3	3
三級整備士全員合格への挑戦	自動車工学コース	4	3
	平均	3.6	3.6

### 評価の尺度

- 5 : かなり成果が上がっている。計画・実践ともよい。望ましい状況である。
- 4 : 一歩前進している。ややよい。よい方向に進んでいる。
- 3 : 普通である。
- 2 : 努力を要する。問題点がある。一歩後退した。
- 1 : まったくできていない。

## 6 自己評価の総括

( ) 昨年度の評価

### (1) 校務分掌等の組織運営の改善（教務部） 評価3（3）

校務分掌の運営効率化を図り、教務システム（PC）を導入して2年目となった。使っていく中で生じた問題点や不具合への対応を繰り返すという状況で、効率化とは言いがたい状況であった。また、ソフト面の整備だけでは改善できないものもあり、ハード面の整備の必要性を感じた。

今回の新型コロナウイルスへの対応に関して、生徒や家庭への連絡法を模索する中で、ICTの有用性を感じた。文理や英数コースにおいては、クラッシーを有効に活用している場面もあり、ICTの整備とともに、その活用力を養成する機会の必要性を感じた。

また、部内の係会で情報を共有することにより、業務の改善が図られている部署もあるので、限られた時間の中での情報共有の在り方を模索したい。

### (2) 挨拶や服装等のマナーアップ（生徒指導部） 評価4（4）

生徒一人ひとりの意識の向上により、挨拶の状況や服装の着こなしが良くなってきている。職員同士の連携が密になることにより声掛けが円滑になり、指導を徹底することができた。しかしながら、挨拶の声が小さい生徒や服装容儀に乱れがある生徒も散見されたので、次年度も連携を密にし、継続的な指導に努めたい。

また、今後は、加速する情報化社会への的確に対応できる生徒の育成が生徒指導上の大きな課題となっているので、スマートフォンなどの情報機器の利用法について、SNS上のマナーなどの情報モラルの醸成に努めたい。

### (3) 個々の生徒理解と適切な支援（教育相談別室支援） 評価4（4）

保健室の利用者数は増加傾向にあるが、今年度認められた支援を必要とする生徒は14名とあまり変化はない。昨年度から、教頭、コース主任、支援係による「別室支援認定の言い渡し」を行っており、生徒の意識改革や保護者の理解に大きく貢献している。また、担任と支援係との連携が密になったことにより、半数以上が教室復帰を果たせたことは良い結果といえる。

今後は、別室での支援期間の在り方などに関する検討が課題である。

### (4) 生徒の能力・適性に応じた進路指導（進路指導部） 評価4（4）

本年度の求人者数は1,906名、そのうち、県内が383名で、求人倍率18.7倍と売り手市場が続いている。本校の就職者は102名で、学校への求人により90名、公務員7名（警察官2名、自衛官5名）、縁故5名で100%の内定率だった。各コース主任、担任を中心として生徒の能力や適性を見極め丁寧な進路指導を進めることができた。

県外希望が56名と昨年とほぼ同じ55%であり、県内46名となっている。

来年度も人手不足は続くとみられるが、経済状況等の不透明感が続いているので、早めの取り組みを実施していきたい。

進学については、文理・英数を除き、私立大学63名、県立短期大学3名、私立短期大学8名、専門学校88名と概ね良い結果であった。一方、AO入試での不合格者もあり、進路希望実現のための多様な学力向上対策が必要である。

(5) 難関大学への挑戦（特別進学指導部） 評価3（4）

文理コースに於いては、医師薬系を含む旧帝大レベル以上の受験者は、安定して10名近く受験するようになっている。来年度は、この数を二桁に乗せていきたい。その上の超難関大学に挑戦できる生徒育成については、手が届かなかった。また、英数コースでも、2年連続合格していた九州大学の受験者が途切れた。これらについては、来年度以降も積極的に挑戦していかなければならない。そのためには、目標を見据えて普段の生活指導をより一層頑張る必要がある。

(6) 募集定員確保のための組織運営（広報部） 評価3（2）

広報部員の増員や部員の授業時間数の軽減などの業務の見直しがあり、今年度は、すべて予定通り業務を遂行することができた。ただ、入試業務においては、受験票の持参や、2種類のシステム併用のため、二重のチェックが必要となり、業務量が増加した。しかしながら、全職員の協力により、入学者が大幅に増加し、募集定員確保という目標を大きくクリアすることができた。

新システムについては、いくつかの課題も判明したので、次年度に向けて検討を重ねながら、計画的なシミュレーションにより実践に繋ぎたい。

(7) 健康と安全の推進（保健部） 評価3（3）

健康管理については、日々の健康観察により健康状態の把握に努め、感染症の予防やスクールカウンセラーを紹介して精神的な悩みを解消するなど、健康管理がしっかりとなされた。

新型コロナウイルス感染対策を含め、インフルエンザなどの感染症対策については、教室・体育施設・寮などの消毒がなされ、感染を防止できた。

性教育講座・救急法講座・薬物講座などには、生徒が積極的に参加し、健康への関心を高めることができた。

施設設備面では、寮にAEDが設置されたり、念願であった洋式トイレが設置されたりするなど生徒の快適な学校生活を助長している。保健室を中心にした定期的なトイレ点検をはじめ、安全点検が毎月実施され、安全管理につながっている。

悩み相談で保健室に来室する生徒が増加しており、心の健康に対するサポートの在り方が課題である。また、新型コロナウイルス感染対策については、消毒・換気・手洗い・うがいなどの実践により感染防止に努めたい。

- (8) トイレ・階段・特別清掃区域の清掃の徹底（環境整備部） 評価4（4）  
環境整備部の目標の一つとして、整備・管理を掲げた。9月に洋式トイレが設置されたので、チェックリストを活用して清掃の徹底を図った。  
特別清掃区域については、人数や担任などの清掃指導の効率化を図り、年度途中で変更をするなど工夫した。ゴミステーションへのゴミの持ち込みについては、清掃時における分別が徹底できないところもあった。また、部活動関係者が放課後や土日など係がない時に弁当がらなどをステーション周辺に放置していることもあったので、各部による持ち帰りを徹底してほしい。
- (9) 図書館の利用促進～貸し出し本の増加（図書館） 評価4（4）  
時間によって利用する科・コースが決まっており、各々のペースで利用するようになってきた。ルールもしっかり守られており、憩いの場となってきたように思う。新刊や話題の本があることで、貸し出しも多くなっている。  
年2回の朝読書週間は、少し事前指導の必要性を感じた。一部取り組みに学級差があるので、職員の共通理解を更に深めなければならない。  
図書館だよりの月一回の発行を心がけたい。
- (10) 窓口での接客対応の充実（事務部） 評価5（4）  
来訪者への挨拶、対応、言葉遣い等については、誠意を持って取り組んできており、接客・応対はよく機能している。業務の集中具合により、事務室職員の昼食時間を十分に確保できないことが課題である。  
また、来訪者が約束の時間に来られても教職員の所在がはっきりせずに連絡がつかないことがある。かなり改善されてきたが、事前に事務室へ所在を連絡することを徹底したい。
- (11) 上級資格への挑戦並びに基本的な生活習慣の徹底（商業科） 評価4（4）
- ① 上級資格への挑戦については、学習意欲がある生徒が多く、日商簿記2級や秘書実務検定2級、実用英語検定2級などの上級資格に挑戦し多数合格した。これは、担当教諭と生徒が一丸となって取り組んだ成果である。  
1年生でも、商業経済検定の複数科目合格や全商電卓検定1級に多数合格した。2年生では、全商簿記検定1級やビジネス文書実務検定1級に多数合格するとともに、今年2年から選択で取り組んだ「医療事務」にも多数合格した。3年生は、高校生活の集大成として、「日本情報処理検定協会」主催の検定、全種目（8種目）1級合格を3名出し、過去最高の結果をあげた。
- ② 基本的な生活習慣の確立については、多くの生徒が、担任など関係するすべての先生方の指導により、挨拶や服装などしっかりしており、落ち着いて行動できている。しかし、一部に欠席・遅刻や服装面で指導を要する生徒もいるので、全職員が生徒とのコミュニケーションをしっかりと取りつつ、根気強く指導を継続し、自分でしっかり考え、行動できる生徒の育成に励みたい。

(12) 服装、挨拶指導の徹底（文理コース） 評価3（4）

生活面の指導の強化を学力向上に繋げようと努力を続けている。全体的に物静かであり、挨拶については、頭は下げるが声が小さいという様子であった。服装については、女子のソックス・男子の第一ボタンに注意が必要な生徒も一部いるが、概ね良好であった。頭髪や服装などは内面が外から見える部分なので今後も指導を継続したい。

(13) 積極的な授業参加への態度の育成（英数コース） 評価4（4）

昨年度に引き続き、新学習指導要領を踏まえ、ペアワークやグループワーク等アクティブラーニングを導入し、授業への積極的参加と理解力の向上を図ることができた。しかし、学級差や個人差が見られ、特に、学級独自で取り組む英単語力や漢字力などのテストや授業中の小テストなどについては、教員全体が指導の共通実践を図りたい。

進路指導においては、今年度も充実を図り、実績に繋がった点は良かった。

今後は、今年度に引き続き、学力奨励学生や別室登校者への指導について工夫が必要である。これらは、個に応じたきめ細やかな指導が必要不可欠であり、知識・技術共に専門性の高い講師による指導態勢の構築を目標としたい。

(14) 豊かな人間性の育成・授業への集中力の養成（未来創造コース）

評価3（3）

「豊かな人間性の育成」においては、日頃の学校活動、授業、部活動に加えて、コース独自の取り組みである「未来塾」と題した進路意識向上のための講演会を2回実施するとともに、職場体験学習、新聞授業、毎朝の新聞コラム配布、国際文化理解（韓国・中国）、コース生徒に活躍などを伝える毎週の「コースだより」などを通じての育成に努め、コミュニケーション能力や責任感を身につけられた場面も多かった。一方、大雨や新型コロナウイルスによる休校により、スピーチコンテストやスキットコンテストなど、コース独自の行事が実施できず、例年に比べると「豊かな人間性の育成」に対するアプローチが少なくなったことは残念であった。

「授業への集中力の養成」については、学習意欲に欠ける生徒・居眠りの多い生徒・授業中の集中力に欠ける生徒が見られ課題が残った。生徒が興味を持って授業に取り組み、集中力が持続できるような授業づくりが急務である。

喫緊の課題が残っているが、素晴らしい生徒もたくさんいる。評価項目の達成を目指し教員の能力を高めていかなければならない。

(15) 各種検定試験と資格取得への挑戦（機械工学コース） 評価3（4）

資格取得への挑戦の目安の一つである全国工業高校ジュニアマイスターの「ゴールド」・「シルバー」の認定者数については、昨年3名から2名に減り一歩後退となった。試験問題の難易度が年々上がっていること、部活動生への

放課後指導が十分できなかつたこと、3年生の進路決定後の取り組みが甘かつたことなどが原因と考えられる。しかしながら、1年生は前向きで意欲的であり、資格合格者は例年を超えているので、来年度に繋いで上級資格に挑戦させていきたい。また、将来を見据えた資格取得を探索するとともに、部活動顧問との連携を密にし、放課後などの指導を充実させたい。

(16) 資格取得、検定試験への指導の充実（電気工学コース） 評価3（3）

全国工業高校ジュニアマイスターにおいて、3年生が「ゴールド」2名、「シルバー」が2名、「ブロンズ」が3名の計7名が取得した。例年1～2名出ていた2年生での「シルバー」が0と残念な結果となった。第二種電気工事士は、3年生が11名、2年生が2名の合格であった。

今年度は検定料の値上げなどもあり、上級資格に挑戦して合格する生徒がやや減少した。また、資格取得への意欲が低い生徒も散見されるので、合格する「喜び」や「手ごたえ」を感じさせつつ、上級資格へ挑戦する意識を持たせるための指導方法の更なる工夫・研究も行いたい。

(17) 三級自動車整備士全員合格への挑戦（自動車工学コース） 評価4（3）

全国工業高校ジュニアマイスターにおいて、「ゴールド」を2名、「シルバー」を6名、「ブロンズ」を6名が取得し、ここ数年では最高の結果を出してくれた。三級整備士についても、国家試験前の特別補修に多くの生徒が参加し、受験者も増加したので、合格者が延べ36名となり、合格率66%と高い数字を残すことができた。職場体験などで整備士への意識を醸成してきた結果だろう。今後は、意欲不足の生徒をどのように巻き込み相乗効果を生み出すかが課題であるので、全員合格という目標達成のため、日頃の授業や教材を更に研究し、専門的な知識の定着を目指して1年から段階的に指導していきたい。

## 7 まとめ

本年度の教育目標には、以下の5点が掲げられている。

- (1) 建学の精神「博文約礼」と、校訓「進取 友愛 誠実」の具現化を図る学校づくりに努める。
- (2) 「私学の教職員」であることを強く意識し、一人一人の生徒を大切にし保護者の期待に応える信頼される教職員により、豊かな発想に基づく創造性に富んだ学校づくりに取り組む。
- (3) 充実した授業実践により、確かな学力の定着を図り、生徒の進路希望実現を支援する。
- (4) 学校の「不易流行」を熟慮し、バランスの取れた学校改革に取り組む。
- (5) 一人一人の生徒や保護者に向き合う特別支援教育を推進する。

さらに、教育目標を実現するための努力目標を次の8点定め、本年度の教育の指針とした。①特色のある学校づくり ②授業の充実と学力の定着 ③高いレベルで文武両道に取り組む生徒の育成 ④確固たる目標を持って上級学校や職場への進路希望実現を目指す生徒への積極的支援 ⑤基本的な生活習慣の確立と心身共に健康な生徒の育成 ⑥教育環境の整備と美化 ⑦創意工夫のある広報活動の展開 ⑧新たな時代の学校改革の推進

この8点の観点により、本年度の教育活動の総括をしたい。

努力目標の①は「特色のある学校づくり」である。生徒指導部が挨拶・服装のマナーアップを目標に掲げ、普通科の各コースで豊かな人間性の育成や挨拶・服装指導の徹底等に取り組んできた。商業科の反省にあるように、一部に服装や頭髪の注意を要する者があるものの、大多数の生徒は基本的な生活習慣が確立されている。女子駅伝部に始まった「立ち止まっての挨拶」は、他の部員へ伝播し、部員意外にも同様の生徒が増えている。文武両道を機軸にしている本校の部活動生全員が、模範となって特色ある校風の醸成に貢献してほしい。このことが入学者の増加に直接影響する重大な要因の一つであることをこれまで以上に自覚させるよう、教師はたゆまぬ声かけに努めたい。

特別支援教育については、「個々の生徒理解と適切な支援」を評価項目に挙げ、教育相談係を中心に取り組んできた。別室（クオリティルーム）でのきめ細かな指導により、半数以上が教室復帰を果たした。いかにして生徒の目的意識を醸成するかが教室復帰へのポイントになる。担任や教科担任のより深いかわりが不可欠になろう。

未来創造コースでの新聞活用を始め、スキットコンテストや中国・韓国を学ぶ国際文化理解などの様々な取り組みは本校教育の特色の一つと言える。今年度は、大雨や新型コロナウイルス感染対策の休校などにより、スキットコンテストを始めとするコースを代表している行事が開催できず残念であった。

世の中のニーズに対応する豊かな人間性の育成に資するために、平成元年から続くボランティア活動を始め、商業科の「樟南マルシェ」や工業科のプランター置台設置などの地域貢献活動とともに、未来創造コースにおける取り組みの更なる充実を図りたい。

②の「授業の充実と学力の定着」については、英数コースが「積極的に授業に参加する態度の育成」を目標に、新学習指導要領への移行を踏まえ、アクティブラーニングを導入し、授業への積極的な参加と理解力の向上を図っている。英単語力や漢字力テストなどへの取り組みも充実しているクラスが増えておりこれらが進路実績に繋がっている。今後も、部活動や生徒会活動との両立を目指す生徒の増加が予想されるので、1年次からの学習習慣の確立を大命題とし、



早期に目標設定をさせるとともに、シラバスを活用させるなど、生徒が自ら積極的に学習する習慣を確立するための研修の機会の設定を図りたい。また、未来創造コースが「授業への集中力の養成」を評価項目に挙げ、授業にグループ活動など動きを取り入れたり、視聴覚教材を活用したりするなどの工夫を行っている。生徒の意欲を向上させることが集中力の養成には不可欠であり、意欲の向上には目標設定が重要である。コース全体として生徒の目標実現に資する具体策の構築が急務であり、それを具現化する教師の力量の増強に努めたい。

③の「高いレベルで文武両道に取り組む生徒の育成」については、進路指導部が「生徒の能力・適正に応じた進路指導」を、特別進学指導部が「難関大学への挑戦」をそれぞれ評価項目に掲げた。就職については、普通・商業・工業の全科で102名、学校への求人票により90名、公務員7名（警察官2名、自衛官5名）、縁故5名で100%の内定率だった。ただ、年度末頃から、新型コロナウイルス感染の影響により様々な企業の業績不振が報道されており、先が見えない状況である。今後の社会情勢を見据え、求人状況を把握して、しっかりと対応することが求められる。進学については、文理・英数を除き、私立大学63名、県立短期大学3名、私立短期大学8名、専門学校88名と概ね良い結果を挙げた。

特別進学部については、文理コースに於いては、九州大学への複数合格という目標はクリアし、難関大にも10名に近い合格者がでたが、その上の超難関大学には少し手が届かなかった。受験者層の厚さの醸成を図りたい。

英数コースでは、2年続いた部活動と両立させての九州大学現役合格はならなかったが、その他は順調な結果を挙げている。近年、競技力の高い生徒の進学コースへの希望が増加しているので、両立のために部活動の顧問と担任や教科担任との連携を基に、個々に対応するための組織的な取り組みが必要である。

医・歯・薬系の希望者増を含め、希望と学力のギャップを痛感させられる結果に終わった者も少なくないので、真の学力養成の努力を継続させることが重要である。また、1年次から志望する大学の難易度を掌握し、バランスのとれた基礎力の定着が根本であるという意識の醸成が不可欠である。そのためには、生徒が高校での学習態勢を構築するための研修などに取り組む必要がある。

また、鹿大医学部の地域枠など国公立大学推薦入学制度への対応策構築も急務である。

④の「確固たる目標を持って上級学校や職場への進路希望実現を目指す生徒への積極的支援」については、普通科未来創造コースや文理・英数コースで、進路指導のスペシャリストによる講演や先輩の講話を聴く機会を設け、生徒の目標設定の一助となっている。未来創造コース、商業科、工業科では、職場体験を実施し、進路希望の構築に重要な役割を果たしている。また、進路指導部

主催により、学年別に年1回実施される進路ガイダンスでは、大学や専門学校などから講師が来校し、生徒は希望するところに参加して具体的な説明を受け進路の探求に活用している。

商業科では、日商簿記2級や秘書実務検定2級、実用英語検定2級などの上級資格に合格している。1年生でも、商業経済検定の複数科目合格や全商電卓検定1級に、2年生では、全商簿記検定1級やビジネス文書実務検定1級に多数合格するとともに、今年2年から選択で取り組んだ「医療事務」にも多数合格した。3年生では、「日本情報処理検定協会」主催の、全種目（8種目）1級合格を3名出し、過去最高の結果をあげた。また、鹿児島大学の合格者も1名出た。これらは、担当教諭と生徒が一丸となって取り組んだ成果であり、在校生の目標設定にきわめて有効である。

工業科においては、機械工学コースで全国工業高校ジュニアマイスターの「ゴールド」・「シルバー」の認定者数が1名減ったものの、1年生の合格者は例年を超えているので、来年度に繋がる土台ができた。

電気工学コースでは、全国工業高校ジュニアマイスターにおいて、3年生が「ゴールド」2名、「シルバー」が2名、「ブロンズ」が3名の計7名が取得した。例年1～2名出ていた2年生での「シルバー」が0と残念な結果となった。第二種電気工事士は、3年生が11名、2年生が2名の合格であった。

自動車工学コースでは、3級整備士の国家試験前の特別補修に多くの生徒が参加し、合格者36名、合格率66%と高い数字を残した。職場体験などで整備士への意識を醸成してきた結果だろう。

今後も、すべての科・コースにおいて、3年間を見通した進路意識の醸成に努める必要がある。意欲不足の生徒をどのように巻き込み相乗効果を生み出すかが課題である。資格の重要性を自覚させるための指導方法を研究し、生徒が自らの将来を見据えた資格取得を探索するよう支援するとともに、部活動顧問との連携を密にし、放課後などの指導を充実させたい。また、日頃の授業や教材を更に研究し、専門的な知識の定着を目指して1年から段階的に指導していきたい。

⑤の「基本的な生活習慣の確立と心身共に健康な生徒の育成」については、心身共に健康な生徒の育成については、保健部主導の日々の健康観察により健康状態の把握がなされており、感染症予防や精神的な悩みの解消にも継続的努力により健康管理がしっかりとされている。

新型コロナウイルス感染対策のため、教室・体育施設・寮などの消毒が恒常的になされ、感染を防止できているので、今後も、換気・手洗い・うがいを励行させたい。

性教育・救急法・薬物などの講座には生徒が積極的に参加し、健康への関心

を高めることができた。

施設設備面では、寮にAEDが設置されたり、念願であった洋式トイレが設置されたりするなど生徒の快適な学校生活を助長している。

悩み相談で保健室に来室する生徒が増加しているので、保健部とクオリティルームとの連携をより密にして、心の健康に対するサポートの在り方の研究を深め、楽しく学べる環境づくりに努めたい。また、生徒が、自ら基本的な生活習慣を確立することにより、心身の健康の維持ができるよう努めさせたい。

⑥の「教育環境の整備と美化」については、環境整備部が目標の一つとして、環境の整備・管理を掲げた。9月に生徒念願の洋式トイレが設置されたので、チェックリストを活用して清掃の徹底を図った。また、特別清掃区域については、人数や担任などの清掃指導の効率化が図られ、概ね良好である。ゴミステーションへのゴミの持ち込みに課題が指摘されているので各部の意識の徹底が求められる。美化コンクールを活性化し、行事前には、正副担任協力のもと全体での共通実践が不可欠である。

⑦の「創意工夫のある広報活動の展開」については、広報部が「募集定員確保のための組織運営」を項目に掲げ、定員確保に努めた。広報部員の増員や授業時数の調整などの業務の見直しにより、ほぼ予定通り業務を遂行することができ、全職員の努力が、入学者の大幅増に繋がった。ただ、入試業務においては、2種類のシステム併用のため、二重のチェックなどの負担が生じた。新システムには、いくつかの課題も判明したので、計画的なシミュレーションにより次年度の単独実践に繋ぎたい。

最後の⑧の「新たな時代の学校改革の推進」については、創意工夫ある教育活動として地域貢献を推進した。30年を超えた特別養護老人ホームでの女子ボランティア活動やマックスバリュー武岡店への木製ベンチや季節の花のプランターとその台の提供、更には、学校周辺の清掃活動を行う男子ボランティア活動などすばらしい活動が展開されている。3年目となった「樟南マルシェ」も地域貢献活動として定着し、生徒たちの地域貢献の心の醸成の一翼を担っている。また、国際交流の基盤となる国際理解を目指した中国語や韓国語に関する総合的な学習も新たな時代を見据えた教育活動であり、今後も拡充が望まれる。「働き方改革」を踏まえた特色ある教育活動を推進するためには、効率的な業務の遂行が必然となる。「自立」する生徒の育成を目指して、創意工夫ある樟南独自の教育活動を展開したい。

今、高校教育は、高大接続改革を中心に大きな転換期を迎えている。この1月の「大学入試センター試験」が最後となり、来年度から「大学入学共通テスト」に代わる。この試験では、思考力や表現力も重視され、国語や数学で記述

式問題が導入される。この導入により、自らの力で考えをまとめたり、相手が理解できるよう根拠に基づいて論述したりする思考力・判断力・表現力が評価されることになる。これは、高校での教育に対する、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を促していくメッセージであり、大学での教育に対しても、思考力・判断力・表現力を前提とした質の高い教育への改善を期待するメッセージである。

英語については、「読む」「聞く」に加え、「書く」「話す」技能を測るため、民間の検定等の活用が検討されていたが、経済・地域格差・公正などの課題解消の見込みが立たず、その活用が延期された。ただ、共通テストでのリスニングの配点比率が大幅に増加するので、しっかり対応しつつ、今後の動向に注視したい。また、高校生の学力向上に向けては、「高校生のための学びの基礎診断」という基礎学力測定検査の結果を踏まえて学力向上に向けた取り組みを組織的に進めることが提言されている。これらを含め、教員の働き方改革・学習評価と指導要録の改定・調査書の電子化など、新たな課題が山積している。

新学習指導要領の総則では、全教科について、教科ごとに「何ができるようになるか」を明確化し、生徒が主体的・対話的に参加することにより、深い学びを得られるような授業に改善しなければならないとしている。質の高い、深い学びを目指すために、教員には、指導方法を工夫して必要な知識・技能を教授しながら、加えて、生徒の思考を深めるために、発言を促したり、気付いていない視点を提示したりするなど、学びに必要な指導の在り方を追求し、必要な学習環境を積極的に設定していくことが求められる。

これらを念頭に、進学希望者については、各コース独自の大学入試改革を踏まえた学習法の研修を行い、新たな流れを取り込んで、早期の目標設定や教科バランスの維持を図ることが急務である。特に、未来創造コースでは、新聞活用、スキットコンテストやスピーチコンテストなどに加えて、職場体験や未来塾と多彩で充実した取り組みがなされているところであり、総合的な探求の時間を活用した国際文化理解にもグローバル化という観点から期待が大きい。

今後は、教育課程の編成や教育内容の新たな構築など、新学習指導要領への移行を視野に入れた取り組みが必要となる。商業科や工業科とも連携しながら、教育内容・方法のリニューアルを図り、新たな総合型選抜（旧 AO 入試）を活用しての国公立を含む大学進学や公務員への道を構築するなど、多様化する生徒や保護者のニーズに応えてくれる学校という社会的評価を確立したい。そのためには、在校生が「がんばれば感動」というモットーの具現者になることが不可欠である。その実現を可能にする牽引者となるのは、教職員にほかならない。生徒により多くの感動を与え、誰もが通いたくなる名門校の創造を目指し、全職員による共通実践を継続することが肝要である。